年生で，こういう事が好きです．就職が決まらないのですが，そちらの職場では……」などもある．電話では，「今，うちの前の電柱を見ていますが，どっちの方向に見えますか？」なども．

やっとひと段落と思いきや……

ほぼ初めの 10 日間は連日上述のような騒ぎで，ほとんど仕事にならなかった．12 月に入って発送数も日に 200 通程になり，ようやくひと段落と一同ほっとしていると，今度は，「某庁との所掌争いが結着して，いわばその仲直りに関係者を呼んで彗星を見せ，一杯やりたい……」，「予算取りにお世話になったのでお呼びしてそのあと……」，「組織，定員の獲得に世話になって……」．時は年末に向け忘年会シーズンでもあり，ものには名目が必要とか．日頃，霞が関に世話になっている立場もあり，この頃は，連日のように天文好きの若手職員に奮気をお願いした．こうした話が伝わると，さらにあちらこちらから観望の希望があり，庁内はもちろん，(運輸本)省内の幹部や水路部内の他の課にも，「ニュース」の件では支援を受けており，観望会も，ずいぶん開いた．我が若手職員は，連日寒空の中，銀座の灯の海の中にかすかに浮ぶハレー彗星を，熱心に，多くの人に順番に，視野のどこにあるかを説明する．気の弱い人は，途中で，はあ，見えましたと言って，望遠鏡から離れ，階段を降りて明るい所あたりで，首をかしげ，「あれ，見えたのかな」．暗い所に入って目が慣れるのにも時間がかかり，都心の灯りも相当で，空の状況によっても，見えた人と見えないらしい人の比が変わる．「今日は，2割しか見えないから悪い」，「半分の人が見えたから普通」，「8割も見えたから最高の部類だ」という具合である．新年に入って，三が日にも希望があったし，既に3月以降の朝方の分の“予約”も頂いている．日頃，海上保安庁が天文をやっているの？などと言われている身としては，我が仕事を理解頂く良いチャンスと心得て，御案内してゆきたいと思っている．

人のうわさも45日だったが……

この騒ぎも，新年に入って急に治ってきた．報道されてから，45 日ほどになるが，免に角忙しかった．最も，この落ち着きは，「ニュース」の内容が1月10日までで，2月上旬発行予定の第3号の申し込みは，既に1000通程に達しており，もう一度あの騒ぎ，という心配もないではない．しかし，今度はもう見えるので，位置情報は不要との“希望”を持っている．本稿を終えるに当って，最後に，1月13日付の朝日新聞の声の欄の松戸市の小山貴さん（教員，51歳）の投書をご本人と新聞社の許可を得て転載させて頂いて締めくくりとたい．

ついにハレーすい星を探しあて，母に二度目の対面を味わわせることができた．

十二月二十八日，重いバッグに三脚と双眼鏡をつめこみ，妻と小学生の娘二人とともに故郷の長野市に帰省した．庭に三脚と双眼鏡をセットし，空が暗くなるのを待つ．六時，くろぐろとした山の上に輝く木星を目印にみずがめ座を視野にいれ，海上保安庁水路部の星座図を頼りに α 星の左に静かに動かしていく……あった！ 淡く青白くぼーっと光っているのは確かにハレーすい星だ．

早速家族を呼び集めた．母の肩を抱くようにして顔を双眼鏡に近づけてやる．「ああ，これが……」．あとは声が出ない．そして双眼鏡から顔を離し，空に向かって手を合わせた．前回接近の時，母はまだ十四歳の少女だった．家の前の蔵の上に，大きく尾を引いた大すい星の姿はよほど印象的だったらしく，私の小さいころは何度も聞かされたものだ．

前回接近以後七十数年が流れ，その間教師として生き，戦争の苦しみを経て娘や夫の死に直面し，病弱だった私を育ててくれた母である．背中は丸くなり，背も少し小さくなった母の合掌する手には七十数年の月日が包みこまれている．七十六年後，娘たちが平安な地球上で子どもにハレーすい星を見せてもらってほしい．

雑　報

NGC 5253 銀河に超新星 (1986 F)

オーストラリヤの R. Evans は 1986年4月24.5日 UT に，NGC 5253 銀河の核から東へ 10 秒角，北へ 20 秒角の場所に光度 13 等級の超新星を発見した．

この NGC 5253 銀河には，過去に2個の超新星の出現が記録されている．まづ Z Cen と称されている超新星は 1895 年に出現し SN 1895 b とも称され Fleming により発見され，極大光度は見かけの明かるさ 8.0 等，絶対等級で −19.8 等のタイプ I 型であった．次に SN 1972 e と称されている超新星は 1972年5月13日にアメリカのコワルによって 8.5 等級で発見されている．極大光度は実視等級で 8.4 等，絶対等級で −19.4 等で，これもタイプ I の超新星であった．

今回の 1986 F 超新星は，これらに続く3個目の出現ということになる．

1984年12月に発表されたパーボン達の改訂版超新星のカタログ (Astron. Astrophys. Suppl. **58**, 735, (1984)) によると3個以上の出現は8個の銀河で，最も多いのは NGC 6946 の6個である．このカタログには 1885年から 1983 年の終りまでに発見されたもの 568 個が収められている．発見時の光度は 15〜17 等であるが，NGC 5253 に出現した2個の超新星は，見かけの光度が大変明るかったことから，強く印象づけられている．